‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

66号 1993.5.24
文・編集・発行
恋怪子

LIVE：FAITH NO MORE 1993.4.20 1993.4.21 中野サンプラザ

1959年にオーネット・コールマンが"THE SHAPE OF JAZZ TO COME"というアルバムを出した。日本のタイトルは「ジャズ来るべきもの」であった。
4月20日、21日に中野サンプラザでFAITH NO MOREをきいて、このアルバムが出たときのことが思い出された。FAITH NO MOREは"THE SHAPE OF R&R TO COME"（「R&R来るべきもの」）である。
すぐれた作品というものは必ず「鏡径」というものを表現しているものであるが、FAITH NO MOREには「現在」とともに「未来」（TO COME）をも表現している。そして、その「未来」は「現在」と離れたものとしてあるのではなくて、「未来」は「現在」の全てを含むものであることがFAITH NO MOREの音楽の多様性、多重性から知ることができる。
マイク・パットンは声量のある圧倒的なヴォーカルで、はじめの一曲から全力で歌いあげる。マイクのシールドをムチのようにふりまわし、よろけたり、床の上をころがったりしても、攻撃的でもなく、自虐的でもなく、実にシンプルでパンクである。おしつけがましいところがちっともないから実に気分がいい。マイク・パットンのヴォーカルが圧倒的であるだけでなく、ギター、キーボード、ベース、ドラムもそれぞれ非常にすぐれている。ところが、どのパートもそれだけが目立つというところが全くない。FAITH NO MOREというバンドがメンバーのうちの誰か一人によって主につくり出されているものだとしたら、その一人は「超人」であるといえるだろうし、メンバー全員でつくり出されているものだとしたら、それは人間が共同で一つのことを為すことの究極のあり方であるといえるであろう。FAITH NO MOREには「バランスがとれている」ことの真の姿を見ることができる。
各パートが長々とソロをやって、それぞれを主張することがなく、マイク・パットンも全力で歌うだけで、ほとんどしゃべらないから、演奏時間はアンコールをいれても1時間半くらいでも、それは実に1時間半である。FAITH NO MOREをきくということはだから、一滴の水も入っていない強い酒をストレートでぐいぐいやるようなものである。全身の血がかけめぐり、真に酔える。FAITH NO MOREで気分よく酔った目には、照明すらが自らの意志で動いている生き物に見えたほどである。
1965年にジョン・ハンディが出したアルバム"RECORDED LIVE AT THE MONTERLEY JAZZ FESTIVAL"のライナー・ノーツの最後をラルフ・J・グリーソンはこう結んでいる。"NOTHING NEW IS HAPPENING IN JAZZ, THEY SAY. OH REALLY? JUST LISTEN TO THIS."（「ジャズには新しいことは何も起っていないって？このアルバムをきいてみるといい。」）
ミック・ジャガーは1981年に雑誌のインタビューで「ロックンロールは終った。全部終った…。みんなローリング・ストーンズやビートルズに歯向うことができないのさ」といったし、このあとも同じようなことをいった人はきっといっぱいいるにちがいない。そういう人たちには"JUST LISTEN TO FAITH NO MORE"といおう。FAITH NO MOREには"THE SHAPE OF R&R TO COME"（「R&R来るべきもの」）といえるものが確かに存在している。

右に載せた部分は全体の1/3ほど。「春風又秋冬」「ストレンジ・バット・ブルー」「かわいい女」などに入っているいろいろな歌についても、ていねいに論じていて、すばらしいエッセイです。

「もともとロックンロールはプロテストではないし、そうだったことはない。それは政治的でもない。それは家族的な緊張感を推し進めるだけのものだし、そうしてきた。現在ではその役割さえなくなった。父親は音楽を聴いて暴力的になったりもしない。ロックンロールは終った。全部終った…。みんなローリング・ストーンズやビートルズに歯向うことができないのさ」
——ミック・ジャガー（1982年「ローリング・ストーン」誌のインタビューに答えて）

ESSAY：山田陽一（「春秋」4月号「うたの風景10」より）

シオンの「声の翳り」

山田陽一
（島根大学助教授・民族音楽学）

CDショップでたまたま手にした《夜しか泳げない》というアルバムのジャケットには、シオンの寂しげな、どこか途方にくれたような眼差しがあった。顔の片側だけが照らしだされ、そこから、すぐにでも生きることを諦めてしまいそうな目が、くっきりと浮かびあがっていた。
シオン——こんなにも男くさくて、骨っぽくて、しかも濃い影を感じさせる歌い手がいたとは驚きだ。おそらく年は三〇代前半くらい。頬と胸に数本ずつの傷痕をもつ男。彼の生み出す音楽は、ときにハードロックであり、フォークであり、ブルースであるのだが、そんな表面的なジャンルをこえて、シオンのうたは、彼という人間の内側をさらけだしながら、彼だけの音楽でありつづけている。奥行きの深いそのうたに、私はつよい共感をおぼえる。
シオンの紡ぎ出す旋律は、しみじみと美しい。その身体から絞り出されるようにして発せられることばは重く、寂しく、ひたすら優しい。そして、その声は、独特の「翳（かげ）」をもつ。それは、単にかすれ声などというのとはちがう。侘しさや、ざらつきや、曇りや、陰影を、すべてかかえこんだような声とでもいえばいいだろうか。そこには、生きることの「澱（おり）」のようなものが、頑固にまとわりついている。生の淀みを表現する声、あるいは、生そのものであるような声……。
その声のかすれぐあいも、ほんの少しの声のにごりも、息の洩れ方も、なかば語るようにうたうやり方も、このうたには、シオンの表現力の最良の面が出ている。とくに、フレーズとフレーズのあいだにはさまれる、ため息とも嘆息ともつかない吐息は、優しさと懐かしさと切なさのいりまじった感覚をみごとに伝えてくれる、とてもすぐれた表現だと思う。

《蛍》（一九九二年）という最新アルバムのタイトル曲にただよっているのもやはり、聴くものの身と心とに沁み入り、内側からゆっくりと溶かし出してくれるような声だ。それは、微妙なゆがみと揺れをはらみながら、はかなげに揺れる。何とも危うげでわびしいけれど、不思議に大きな包容力を感じさせてくれる声だ。
「蛍を見るなら、あの町がいちばんさ／小さな川には、いくつも橋がかかってよ／ひっそりと、そしてあったかい……小さな町だし、何もない町だけど／二、三年いただけで、どうってことない町だけど／なぜかやたら、やたらいいさ……一の坂川へ、お前を連れて／一の坂川へ連れて帰る……」
このうたがひきおこす感動を、いったいどのように表現すればいいのだろう。静かで、穏やかで、しみじみとした気分。ゆったりと、そしてゆっくりと、昔へと、あるいはどこかへと回帰していく気持ち。それは、ただノスタルジーということばでは、到底いいあらわすことのできない感覚だ。シオンの声は、ごく自然に、そのしあわせな境地へとわれわれを誘ってくれる。
シオンのうたには、無常感と希望が、あるいは、あきらめと優しさとが同居している。それが、彼のうたに豊かなふくらみと、類まれなリアリティを与えていることはまちがいない。だが、同時にそれは、独特の翳りを、彼のうたのテクスチュアにもたらすこととなった。
シオンがうたってきたのは、そうした、生きることで背負わざるをえない相克であり、生きてゆくことにつきまとう愁いであり、影なのだ。彼は、そうした翳りのある情景を、ざらついた声と叫びとため息によって、実にさりげなく、実にヴィヴィッドに描きあげる。ここにいるのは、深い哀しみを知るがゆえに、深い愛にみちた生活者だ。

（このエッセイを切りぬいて送ってくださった岡田幸文氏に感謝いたします。）

LIVE：KOOL KRAZE 1993.4.30 新宿アンティルーク

KOOL KRAZE シルエット 1993年度版

他のバンドをききにいったときに2回KOOL KRAZEを見て、ベースの人の印象が強く残って、KOOL KRAZEというバンド名をすぐに覚えた。その後、手帳にいつもライブ・スケジュールを書いていたのだが機会をつくれずにいた。4月30日、半年ぶりくらいに見たKOOL KRAZEは、ギター＝ヴォーカルがとてもよくて、歌がよくききとれた。そして、3人のバランスとパワーがすばらしかった。この日、KOOL KRAZEの前にとびいりでJACK KNIFEが出た。ちゃんとした演奏で好感はもてたけれど、その後でKOOL KRAZEをきいたら8人編成のJACK KNIFEより3人編成のKOOL KRAZEの方がパワーもあるし、音楽もゆたかだったので、JACK KNIFEの印象がうすれてしまった。

WORDS：野村美史（「ぴあ」4月13日号「YOUとPIA」より）

ライブ会場での心無い人たち

それは長渕剛の武道館公演の時だった。ラストを飾る曲「マザー」の演奏中、誰かがクラッカーを鳴らした。長渕のライブでは「勇次」の2コーラスめでクラッカーを鳴らすのがお約束になっているのを、その残りをはじいたのであろう。しかし、その一発をきっかけに、次の瞬間あちこちから連鎖的にクラッカーが鳴り出したのだ。その時、ギターとピアノだけで奏でられた美しくも哀しいバラードは、その素晴らしさをあっけなくぶち壊された。僕はその愚かな行為に呆れ果てた。長渕もきっと快く思っていなかったはずだ。
最近、ライブに訪れる観客にマナーに欠けた行為が目立つ。このような場所以外にも、スタンディング形式の会場で、場内禁煙・すし詰め状態であるにもかかわらずタバコを吸うヤツ、空き缶や入り口で配られたチラシを床に平然と捨てるヤツが後を絶たない。この心無い連中の行為は、ライブの楽しみや興奮を大きく減らしているのだ。コンサートは自分だけのものではなく、みんなで共有するものだということを、もう一度よく考えるべきだ。
［世田谷区／野村美史］

「長渕のライブでは「勇次」の2コーラスめでクラッカーを鳴らすのがお約束になっている」って。よい子のみなさ〜ん、お約束を守って、マナーを守ってお行儀よくライブを楽しみましょうね、なんて言いたくなってしまう、こういうのを読むと。